

ロバート・バートン
『憂鬱の解剖』
第1部 第2章 第3節 第11-14項

岡村 眞紀子
川島 伸博 訳

第11項

原因としての欲望的欲求。欲望と野心。

欲望的欲求と気概的欲求は、あざなえる縄のごとく、互いに交じり合い、ともに心臓の周りに絡みついている。アウグスティヌスが『神の国』(14.9)で主張するように、どちらも「度を越えていなければ」健康によいが、「度を越えると有害となる」。欲望的欲求は、快樂や愉悅をもたらすようにみえる。また我々の欲望は、欲する対象を得て満たされることも多い。しかし、欲望の度が過ぎると、反対に我々を苦しめ、悩ませることとなる。「欲望は休むことを知らぬ」とはよく言ったもので、欲望それ自体は、無限であって、際限がない。果てしない拷問台とも、止むこと無いひき臼とも言われ、アウグスティヌスによると、欲望は円を描いて回り続ける。また、欲望は、その持続性でよりも、その多様性で際立っている。ベルナル曰く、「心の動きをあれかこれかと考えるよりも、原子を数え上げる方がたやすかろう」。ガイネリオによると、「欲望はあらゆるものに向かい、しかも、それらは過度に求められる」。フェルネルは、あらゆるものに「熱烈な欲望」が向けられるとする。欲望はどんな種類のものであれ、度を超えると人を苦しめ、プラタ等によれば、憂鬱症の主たる原因となる。「我が思考は、あまたの欲望によって引き裂かれる」とアウグスティヌスは告白している。ベルナルも「欲望のせいで、ひと時も休まることはない」と嘆き、「これが欲しいかと思えば、あれが欲しい。あなりたいかと思えば、こうなりたいと思っている」と述懐する。それゆえ、欲望の及ぶ対象を見極めるのは困難であり、種類と数があまりに多いので、すべてを理解するのは不可能である。そこで、私としては、欲望の中でも主要で有害なものに議論を絞りたい。まずは出世欲、名誉に対する過度な欲望、すなわち野心。次に金銭欲、つまり貪欲、利得に対するあくなき欲望。第三に自己愛、すなわち虚栄や称賛に対する自惚れと過度な欲望。あるいは学問に対する過度な欲望。最後に、女性に対する欲望(それだけで、一冊の本になってもおかしくない)。欲望に関する議論は、これらに限定し、

その他のものに関しては簡潔にふれる程度にして順次述べていく。

野心は、高慢な貪欲、名誉の渴望であり、心に激しい苦痛を与える種となる。嫉妬と高慢と貪欲から構成され、「華美な狂気」、あるいは、「心地よい毒」と定義されることもある。アンブロウシスによると「魂を齧る虫、体内に潜む疫病」であり、ベルナル曰く、「秘められた毒、嫉妬の父、偽善の母、神聖を蝕む蛾、すなわち狂気の原因であり、野心に取りつかれた者はみな苦しみ、心乱れる」。セネカは「人を不安、臆病、虚栄、空疎にするもの」と呼ぶ。というのも、この野心という岩をシシュフォスのように休むことなく転がす者は、通例、永遠に続く苦悶のもとに置かれ、たえず心乱れ、「人知れず、そして惨めに落ちていく運命」（ルクレティウス）だからである。野心に取り憑かれた者は、疑い深く、びくびくして、疑心暗鬼となり、人を傷つける言動を避けるようになる。彼らは誤魔化したり、騙したり、党派を組んだり、隠蔽したり、諂ったり、称讃したり、おべっかを言ったり、愚弄したり、出向いたりするが、その訪問の際は、戸口で愛想よく、正直で謙遜な態度を取りつくろって待つ。それでも上手くいかない場合、キプリアヌスの言葉を借りると「渴いた魂が野心という塩水でさらに渴き」、なんとしてでも望みを達成しようとし、「穴から這い上がり、名誉ある地位まで登りつめようとする。昇進が可能な場合は、お世辞を言ったり、賄賂を渡したりして、すべてを獲得するために、あらゆる手段を駆使する」。この種の人たちが願いを達成するために、目下の者にも奴隷のように諂うさまには、目を見張るものがある。彼らは目的達成のためには多大な労力を惜しまず、駆けずり回り、馬に乗っては東奔西走し、敵を追放したり、策略や対抗策を練ったりし、臆面もなく抗議したり、誓ったり、誓約したり、約束したりする。彼らが朝早くから夜遅くまで、必死に動き回るさま、人に諂い、愛嬌をふりまくさま、人に好かれようと恭しくするさま、出会う人には誰彼かまわず、にっこり、愛想笑いするさまほどあさましいものはない。彼らは目的達成のために、宴会を催しては、人を招待し、多大な財産をつぎ込んでいるが、その多くは、やらないにこしたことはない無駄遣いである。弁術家キネアスがピュロスに言ったように、こういった人々は、眠れない夜を過ごし、つらい時間が続き、不安な思いに駆られ、心が苦々しくなり、「希望と恐怖との間にあって」、気もそぞろで、疲れ果て、時間を浪費する。目下のところ、これほど恐ろしい疫病はない。たとえその願いを達成したとしても、そのために多大な金と気遣いを費やすので、自由になることはなく、新たな不安が始まる。というのも、彼らは決して満足することなく、「権力のことしか考えていないからだ」。彼らの思考、行動、努力はすべて支配と名誉に傾けられる。「類まれな知識を持っていたものの、激しい野心に取り憑かれ、わが身とイタリアに破滅をもたらした」かの高慢なミラノ公爵ルドヴィーコ・スフォルツァのように、たとえ、わが身と友人たちの破滅につながるとわかっていたとしても、競争し続け、その競争をやめることはない。しかし、ビュデが比喩を用いて言うように、彼等は輪の中の犬、籠の中の鳥、鎖に繋がれた栗鼠の如く、「必死に登り続けるが、決して目的地にたどり着くことはなく、頂上に立つこともない」。騎士は準男爵になっても、男爵の地位を求め、その後は子爵、伯爵と登り続ける。教会博士は首席司祭を目指し、次は司教

を目指す。護民官なら法務官，町役人なら市長，というように，目的の地位についたかと思うと，すぐその上の地位を求める。プルタルコスに出てくるピュロスのように，ギリシアを制圧したかと思うと，次はアフリカ，その次はアジアという風に追い続け，イソップの蛙のように膨れ上がり，ついには破裂してしまうか，「ゲモニアの階段」からテベレ川に投げ捨てられたセヤヌスのように没落するか，自殺することになる。あるいは，ルキアノスの，才能もないのに死ぬまで笛を吹き続けたエウァンゲロスのような結末を迎える。それでいて，もし失敗したり，負けたりすると，これとは別の地獄に落ちるはめとなり，その落胆の度合いは激しく，簡単に首をつったり，異教徒に転じたり，トルコに寝返ったり，瞬間に謀反人となったりする。敵に対して激昂すると，罵詈雑言を言い，罵り，戦い，悪口を言い，貶め，嫉妬し，殺害する。そして自分自身，「その欲望を満たすことができないと発狂する」（ボダン）。このどちらもが起こりうるわけだから，野心がつづく限り，心乱れ，不安と心配に襲われ，満たされず苦痛を感じるようになり，最後は狂気に陥るか，自殺に至る。こういった顛末は大都市でよくみられ，宮廷にも多い。というのも，宮廷人の生活は，ビュデ曰く，「野心と欲望，欺瞞といかさまと偽り，誹謗，嫉妬，高慢の寄せ集めであり，宮廷に集まるのは，おべっか使い，日和見主義者，策士ばかり」，あるいは，アントニオ・ペレスが言うように，宮廷は「地獄に接している」からである。満ち足りていない人がいるとして，その人が宮廷に出入りする人である確率は高い。これはプラウトゥスが古代ローマの生活について述べたことと一致する。

裏切り者に会いたいというなら，民会場へ行けばいい。

嘘つきや見栄っ張りに会いたいなら，ウェヌス神殿に行けばいい。

金持ちなのに吝嗇な人なら，バシリカ公会堂を探すのにしくはない。

裏切り者，偽証集団，嘘つき，見栄っ張り，吝嗇などは，探すべきところを探せば必ず見つかる。この法則はどの国でもつねにあてはまり，どの時代にもあてはまる。

第12項

ビラルギュリア

金銭欲。原因としての食欲。

「身体の病は魂の病よりも激しいか」について，プルタルコスの見解は以下の通りである。「この世における我々の苦痛のあらゆる原因について考察してみると，たいいていの場合，その出所が食欲であることがわかる。すなわち，我々の苦痛は，あの頑迷なる怒り，争いを求める激情，不当で過度な感情である食欲から生じている云々」。聖ヤコブは「汝等の戦争や争いは」どこから生じるのかと問うが，これに加えて私は問いたい。高利貸し，詐偽，略奪，聖物売買，圧制，虚言，冒涇，偽証などはどこから来るのか，と。その出所は，この食欲という泉に他ならない。金銭を手に入れようとする意地汚さ，手元に置こうとする執拗さ，手放そうとしない卑しさ。これ

らは邪悪であり、「神と隣人と己自身に対する不義」であり、すべてはここから生じる。「金銭欲はあらゆる悪の根源であり、金銭を欲するものは、自らを悲しみという矢で突き刺すこととなる」(「テモテへの第一の手紙」6.10)。それゆえ、ヒポクラテスは薬草医のクラテウァに宛てた書簡で、以下のように優れた助言をする。可能であるなら「薬草医はとりわけ貪欲という雑草を、痕が残らぬよう根っこから切りとるべきである。このことをしっかり覚えておきなさい。そうすれば患者の身体の病と一緒に、その人の心の病も素早く治療することができるだろう」と。というのも、貪欲こそまさに、多くの苦痛、大いなる不満、心配、嘆きの泉となるあらゆる憂鬱症の原型、典型、縮図であるのだから。貪欲はボナベントゥーラによると「金銭を獲得し、溜め込もうとする異常で度を越した欲望」と定義され、他にも「魂の狂気」(アウグスティヌス)、「責苦」(グレゴリウス)、「飽くことなき渴望」(クリュソストモス)、「盲目、美しい姿で目を欺く責苦、王国や一族を破壊する疫病、治すことのできぬ病」(キプリアヌス)、「どんな治療も利かぬ悪弊」(ビュデ)と形容される。医神アイスクラピオスでさえ、あるいは富神プルーツでさえ治すことはできない。ソロモン曰く、やむことなき疫病、精神の苦痛、地上における地獄である。こういった見解に対して、貪欲な人は幸福で賢明だという見解の人、浪費するよりも富を貯め込む方が楽しく、これに勝る悦びはないという見解の人もいる。「君が飽きないことは何だ？ 金を貯めることだ。もっとも嬉しいことは何だ？ 金を手に入れることだ」。この賢人ピアスの問答は古くから知られている。そもそも、貧しき者が死ぬまで働き続けるのは何ゆえか。あれほどの重荷を背負い、苦しい暮らしを強いられ、やつれ果ててまで、悲惨な生活に耐えている。お金を稼いで貯め込むことに喜びがないとしたら、彼らが早起きして、夜遅く床につくまで、あれほど忍耐強く、あれほど卑しい仕事をするのは何ゆえだというのだ。あるいは家には暮らしていくのに十分な、いやそれ以上の蓄えのある商人が、厳しい気候の熱帯や寒帯など、世界中を経巡るのは何ゆえか。彼らが自ら進んで危険を冒し、臭い船底で惨めな食事と汚らしい生活に耐えるのはなぜか。金儲けができるという悦びと希望があるからこそ、彼等は我慢ができるのであり、間断なく襲う彼らの苦痛も和らぐのだ。また、十分な蓄えがあり、そんなことをしなければならぬ理由などないにもかかわらず、命の危険を冒し、じめじめとして悪臭放つ場所に耐えてまで、百尋にも及ぶ大地の鉱脈深くに入っていく人々もいるが、それも金持ちになれるかもしれないという大きな喜びがあるからに他ならない。こういった考え方は、一見したところ、妥当に思えるし、実際、人口に膾炙した根強い見解である。しかし、このように考える人には、もう少しよく考えて欲しい。そうすれば、自分の考えとは正反対だということがすぐにわかるだろう。多くの憂鬱症がそうであるように、貪欲も最初は幸福で楽しげに見えるのである。というのも、こういった人々にはたいてい輝ける時間が何度か訪れ、一時的に心地よい症状が出るからであるが、ここで心に留めておくべきはクリュソストモスの言葉である。「金持ちになると、貪欲になるのは、まったく別のことである」。一般に、貪欲な者はみな愚かで、阿呆で、狂い、惨めで、己を見失い、楽しむ術を知らず、絶えず隷属状態にあって、恐れ、疑い、悲しみ、不平を言うので、「甘き蜂蜜より苦きアロエに満ちている」。そして実際、キプリアヌスが言うように「金銭を所有するというより、

金銭に取り憑かれて所有され、プリニウス曰く「**金銭に売り渡され**」、自分たちの所持品に縛られた徒弟、クリュソストモスによれば「**所持品の奴隷**」になりさがる。締めくくりとして引用したいのは、ヴァレリウスがキプロス島のプトレマエオス王について述べた言葉である。「彼はその島の国王という立場にあったにもかかわらず、その内面は、金銭にとらわれた惨めな男にすぎなかった」。

——彼には金銭より大事な
自由が欠けている——

ホラティウスに出てくるストア派のダマシプスによれば、生きとし生ける者は誰も、なんらかの形でおかしくなるものだが、貪欲なる者はとくにひどい。貪欲な人々の財産とその症状とをよくよく調べてみるとよい。彼らがナバルのごとく「**名実ともに**」（「サムエル記上」25）愚者にすぎないことがわかるだろう。というのも、彼らは必要もないのにやつれ果てているのだから、これほどの愚行、狂気はない。またキプリアヌスが言うように「貪欲な人は、一旦は重荷から解放され、その苦痛も和らぐかもしれない。しかし、富が増えて余剰が生じると、止まることなく求め続け、我を失い、精神を死なせてしまう。妻と子供を遠ざけ、身内のものや友人に対しても、彼らにも当然の権利があり、必要に迫られている場合でさえ、その富を使わせたり、享受させたりすることはない。まるで飼いや葉桶の豚や犬のように、貪欲なる者は、他の人には役に立たないと言い張り、自分の富を分け与えることなく、自分自身と周りの人とを傷つける。こうして、ちょっとした金銭を出し惜しみすることで、その魂は墮獄するのである。たいていの場合、彼らは生まれつき哀れで鬱々として、ナボラの葡萄園を手に入れることが出来ずに嫉妬したアハブの精神のようだ（列王記上 21）。どうしても必要なときや、子供の利益のために、お金を手放さなければならなくなると、貪欲な者は、心沈み、乱れ、手放したくないと、騒ぎ立てる。「**惨めな者は差し控え、使うことを恐れる**」（ホラティウス）。外見はやせ衰え、萎びて蒼ざめ、心配事や世事のために眠れない。ソロモン曰く、その富ゆえに貪欲な人は眠れず、無用な厄介事ばかりがたまっていく。もし眠れたとしても、その眠りは穏やかでなく、途切れがちで、決して心地のよいものではない。

——いたるところで金銭袋をかき抱え、
大口を開けて眠りこける。——

宴会や祝宴の席にあっても、「貪欲な者は心苦しくため息をつき、たとえ羽毛のベッドであっても眠ることができず、彼のやせ衰えた身体は休まることがない」（キプリアヌス）。「富ゆえに苦しみ、富めるがゆえに悲しみ、現世を楽しまず、来世はさらに惨めである」（バジル）。常にあくせく働き、思考は乱れ、決して満たされることはない。貪欲な人は、奴隷であり、惨めであり、

虫けらである。「彼は自らの偶像に捧げるものを常に求め続ける」(キプリアヌス「説教序文」)。そのための手段は問わないので、厄介事は尽きず、「富は増えても、何かがつねに欠けている」。まるでファラオの痩せた豚のように、どんなに食っても、満たされることはない。それゆえ、アウグスティヌスは「どんなものでも満たすことのできない見境のない欲望」と貪欲を定義し、ある書簡では地獄に喩える。「すべてを貪り、それでいて決して満たされない、底なしの穴」、永遠に続く苦しみ。「老人たちも死ぬ間際まで、しばしば貪欲という岩礁に乗り上げる」。強力な腐食剤であり、貪欲な人たちは常に疑い深く、恐れ、不信に陥る。自分の妻や子供たちも、自分を落とし入れようとする盗人だと思ひこみ、召使はみな嘘つきだと思っている。

自分の小屋から煙が外に出ようものなら、
財産を失い、破産したと思ひ込み、
すぐさま、「お助けよ」と叫び出す始末。

「富神プルートのように怯える」と古諺にあるように、人は金を持っているほど怯えるものだ。アリストパネスやルキアノスも同様に考え、富める人を、つねに怯え、蒼ざめ、心配性で、疑い深く、誰も信用しない人物として描いている。「彼らは作物の心配をして嵐に怯え、何か頼みごとをしにきたり、物乞いしたり、金の無心をしてくるのではないかと、友人にも怯える。もちろん自分たちに危害を加えるのではないかと敵にも怯え、盗みを働かれはしないかと泥棒にも怯える。彼らは戦争に怯え、平和にも怯え、裕福に怯え、貧困にも怯え、つまりあらゆることに怯えている」。何より彼らは、財産がなくなって乞食として死ぬことを恐れ、それゆえ、つねに蓄え、自分の所有するものを使おうとはしない。不作や飢饉、損失があったりすると、縄紐を買う金を惜しみさえしなければの話だが、彼らはそれで首を吊ってしまうだろう。作物が枯れたり家畜が死んだりすると、彼らは余計な金を払いたくないばかりに、死ぬこともある。アウルス・ゲリウスが指摘するように、まだまだ富が残っているにも拘らず。ウァレリウスには、飢饉の際に、食料不足につけこみ、ネズミ一匹を二百ペンスで売り、あげくに餓死した人の例が挙がっている。富める者の心配、苦しみ、永続的な恐怖はこれほどまでに激しい。こういった症状についてはテオプラストゥスが巧みに表現している。『性格さまざま』の貪欲な男は「ベッドで横になりながら、妻に問う。鞆と箱の蓋はきちんと閉めたか、封をしたか、玄関の扉にはさし錠をしたか、と。たとえ妻がきちんとやりましたと答えたとしても、彼はベッドから起き出して、上着一枚、ズボンもはかず、裸足のまま、節約のため油をけちった灯籠をかかげ、本当かどうか家中隈なく確認しに行くので、一晩中、ほとんど一睡もできない。ルキアノスの愉快痛快な対話『にわとり』には、ミュキッルスという靴直しと、かつてピタゴラスだったという鶏が出てきて、議論を繰り広げる。賛否両論、喧々囂々やりあった末、ピタゴラスは、富はほどほどにあるのが幸せで、金持ちは幸せにはなれないという持論を例証するため、真夜中にミュキッルスを金貸しであるグニユポンの家とエウクラテスの家へ連れていく。するとこの金持ちは二人とも起きていて、金を数え、何度

も計算している。どちらも痩せこけ、干からび、蒼ざめていて、心配性でつねに誰かが侵入しようとして壁に穴を掘ろうとしているのではないかと疑っている。またネズミが物音を立てようものなら、飛び上がって、扉まで駆けて行き、鍵がきちんとしてしまっているか確認するありさまだった。プラウトゥスの『黄金の壺』にもエウクリオという老人が出てきて、妻のスタピュラに、侵入者が入ってこないよう、家の戸締りをしっかりさせ、家中の火を消すように命じる。この男は手を洗った後の水を捨てるのさえしぶる吝嗇で、煙が煙突から出て行くのを見て、それがもったいなくて、自分は破産したと嘆いてみせる。また外出中に、カラスがこやしを漁っているのを見ると、それを自分の金が掘り出された「凶兆」とみなし、急ぎ家に戻ったりする。彼らの行動を少しでも観察したことのある人なら、こんな風に描かれた場面が、戯れに創り出されたものではなく、実際に行われていることに気づくだろう。また、このように貪欲で惨めな輩は、まさに以下の言葉の正しさを立証する。

——狂気の沙汰としか言いようがない、
裕福に死にたいために、貧乏に生きるなんて。

第13項 原因としての賭博狂など、過剰な快樂。

通りや小路には必ずといって、貧困窮まり惨めな乞食となって物乞いをする輩がいるものだが、彼らの多くは家柄がよく、かつては栄えていたこともあるというのだから驚きだ。それが今や檻縲を纏い、やつれはて、餓死寸前、満たされることなく、心身ともに擦り切れ、苦痛まみれの生活を無為に過ごしているわけだが、これはすべて、過剰な欲望、賭博、快樂、放蕩が原因である。これは、快樂貪るエピクロス主義者や肉欲に溺れた放蕩者がみな決まって辿り着く結末であり、彼らはさまざまな快樂や欲望によって麻痺し、真逆さまに落ちていくのだ。こういった輩が辿る運命を巧みに説明するのは、ケベースの人生絵図や聖アンブロシウスのアベルとカイン論第二巻、とりわけルキアノスの『禁欲論』である。ルキアノスによると、「富」は高さ山の頂上にあって、多くの人がそれを求めてやってくる。初めてやってきたときは、「快樂」と「恋の戯れ」によってもなされ、およそ考えられるすべての快樂を満たされるのだが、それも金の続く限りで、金がなくなるやいなや、彼らは嘲弄されて裏口から真逆さまに突き落とされ、行き着く先は、「恥辱」、「不面目」、「絶望」である。最初のうちは召使、取り巻き、従者を数多く従え、若くはつらつとして、着る物も立派、手に入れることのできる贅沢品はすべて食し、歓待され、尊敬されていた人物が、ある日突然、すべてを奪われ、蒼ざめ、素寒貧、年老い、病気になって打ち棄てられ、自らの運命を呪い、いつ首を縊ってもおかしくない。こうなると彼の周りに残っているのは、「後悔」と「悲しみ」、「苦痛」と「嘲笑」、「物乞い」と「軽蔑」だけであり、これらが死ぬまで付き纏う。聖書に出てくる放蕩息子が、最初のうちは、贅沢な音楽を楽しみ、愉快的な仲間がいて、

ご馳走を食べていたにも拘わらず、結局は、悲しい最後を迎えるように、空しい喜びとそれを追い求める人々の結末は決まって悲惨なものである。「**快樂の結末は悲惨であり、自分の快樂を追い求める者はみなその結末を知ることとなる**」。彼らの結末は胆汁やヨモギのように苦く、心の苦痛であり、狂気そのものである。こういった人々がぶち当たり、真っ逆さまに落ちていく原因となる岩山は、たいていが、トランプであり、博打であり、鷹狩であり、猟（「**獵狂**」）であり、建物（「**建物狂**」）であり、気晴らしであり、遊戯であり、理不尽なほどのお金がつぎこまれ、愚かにも破産する。まずは、狂気の沙汰としか思えない贅沢な建物にこだわり、財産を食いつぶしてしまう人がいる。彼らは回廊や柱廊や遊歩道、果樹園に庭園、池や小川に四阿など、快樂の場所を作る。これらは、クセノポンの言葉を借りれば「**無用の家**」にすぎず、確かにそれ自体楽しいものであり、見るものを喜ばせる装飾でもあり、高貴な人々にはふさわしいのだが、そうでない人には無用の長物にすぎず、それだけで財産を食いつぶしてしまう。フォレストの診察にはこれに相当する例が挙がっている。その患者は、無用な建物に財産をつぎ込んだが、その建物は何の役にも立たず、それが原因で憂鬱症になったという。建物狂の次には、鷹狩や猟などに狂い、身を崩す人々がいる。こういった狩猟は、高貴な人々には問題なく、ふさわしい娯楽だが、身分が卑しく劣った人には、必ずしも向いているわけではない。これらの遊びをするためには、鷹匠や犬や狩猟馬を維持せねばならず、ザルムート曰く、彼らの富は「**獵犬とともに駆け去り、彼らの財産は鷹とともに飛び去る**」。アグリッパが非難するには、彼らは長きにわたって獣を追い求めるので、仕舞いには、アクタイオン同様、自ら獣にまで身を墮としてしまう。というのも、アクタイオンが自分の獵犬によって食い殺されてしまうのと同様に、彼らは狩猟という怠惰で無用な遊戯に夢中になるあまり、必要な仕事をするのを怠り、職務を放棄し、自分たちのみならず、親から受け継いだ財産をも食いつぶしてしまうからである。また、高貴な人々でさえも、こういった遊戯に喜びを見出し、あまりに夢中になりすぎて、狂ってしまう場合もある。ソールズベリのジョン（『ポリクラティクス』1.4）が批判するように、「**高貴な人が、獵園や森林を作るために貧しい農夫を耕作地から追い出したり、田舎の農園や町全体をつぶし、人々を餓死させ、野獣の餌にすることもある**」。「**また自分たちの獲物を苛める輩がいれば、他の傷害罪や窃盗罪を犯す者よりさらに厳しく罰する**」。しかし、高貴な人たちはなんとか言い逃れができるのだが、身分不相応に狩猟にはまる人たちは狂気とみなされても仕方がない。フィレンツェ人ポッジョには、これと関連する面白い話があって、この種の人々の身分不相応な愚かさ戒めている。ミラノに狂人の治療をする医者が出て、その医者の家には水桶があり、「**狂気の度合いに応じて**」、患者をその水に膝まで、あるいは腰まで、ひどいときには顎までつからせ、治療していたのだという。あるとき、その治療によってうまく回復した患者が、医者の家から足を踏み出すと、たまたま伊達男が馬に乗り、手には鷹を載せ、馬具も立派、スパニエル犬を数匹引き連れているのを目にしてしまう。好奇心にかられた患者は、これは何のためにやっているのかと問う。男が、鳥を狩りに出掛けるためだ、と答えると、患者はいぶかしがって、一年で手に入れる鳥の値打ちはどのくらいか、ともう一度たずねる。男が、五クラウンか十クラウンくらいだ、と答えると、患者はさらに、

それでは引き連れる犬や馬や鷹はいくらくらいするのかと問う。男が、四百クラウンだと答えると患者はその男に厳しく命じたのだという。「もし幸福な人生を送りたいなら、立ち去れ。先生が出てきて、お前の今の状態を見たとすれば、きっとお前を顎まで水につかる狂人たちに仲間入りさせるだろう」と。このように患者は、自分の仕事と必要な職務をないがしろにし、怠惰な遊戯にお金を費やす虚栄な男を諫めたのである。かの狩猟好き教皇レオ十世は、生前ジョヴィオに激しく非難されたが、それは彼が鷹狩と狩猟を過剰に愛したからである。ジョヴィオ曰く、この教皇は狩のために、何週間、何ヶ月にもわたってオステリアで過ごし、懇願者たちに目もくれず、勅書や免罪符にも署名しなかった。これは彼の個人的な趣味のためであり、そのために多くの人が損害を被ったのである。「また狩猟中に誰かが邪魔をしたり、獲物が満足いくものでなかったりすると、彼はいらいらし、高貴な人々に対しても、何度となく激しい言葉で当り散らし、むすつとして、怒りっぽく、癩癩もちになった。その苦しみようは信じられないほど激しく、ここに書くのも憚られる」。ただ、狩りが楽しく進み、獲物も満足のいくものであれば、「信じられないような気前のよさで」狩仲間を褒美を与えた。また、こういう気分の時には、どんな懇願者が来ても、決して拒まなかったという。こういった側面は、実のところカーサの指摘するように、あらゆる賭博師に共通する性格であり、勝つと、これほど陽気で愉快な輩はいないほどののだが、負けると、それがどんなに些細な負け（数回の負け、あるいはトランプで二ペンスほど）であったとしても、彼らはイライラ怒りっぽくなる。こうなると、誰も話しかけようとは思わないし、ちょっとしたことで感情を爆発させ、罵ったり、呪ったり、狂人と見境のつかないような汚らしい言葉を吐いたりする。ここで賭博や賭け事全般についてまとめておくことにする。賭け事は度を過ぎると、勝ち負けに関係なく、勝ち取ることができるのは、賢人セネカの言葉にあるように「幸運の賜物ではなく、罫の賜物」、たいていの人には破滅し、物乞いとなる。「まるで疫病が命を奪い去るように、博打は金を奪い取り」、「みな素寒貧の無一文、乞食同然となる」。

博打は食欲なるスキュラ、確実に奪い去る盗人、
 持ち金だけでは満足せず、魂をも沈めてしまう裏切り者、
 汚らわしく盗みを好み、恥知らずで怠け者、狂っていて破滅をもたらす、

というのも、ほんの少し何度か勝って、幾ばくかの快楽を享受するうちに、彼らは妻と子供を苦境に追い込み、心も身体も喪失し、結局は後悔する羽目になるのだから。こういった桁外れの放蕩者については何も言いたくないのだが、サルスティウスは聖アントニウスの父を「金を失うために生まれてきた」と非難しているし、彼らはキプリアヌス曰く「公衆の面前で恥知らずにも散財する輩」、シュバリス市民のように贅沢に耽る狂った浪費家であり、「一回の食事でも有り金を使い果たしたり」、売春宿の女将や幫間や役者に囲まれて瞬く間にご破算となる。このように彼らは大きな賭けをしたり、空虚でくだらない出費で、あたかもテベレ川に投げ込むかのように金を使うのだが、破産するのは彼らだけでなく、その友人たちも巻き添えとなる。ちょうど溺れる人

が必死に泳ぐあまり、助けに来た人まで溺れさせてしまうように、彼らは保証人になってもらったり、金を借りたりすることで、往々にして知人や仲間をも破滅させる。「**彼らは自分の金に苛立つ**」とセネカは言う。「淫らな目、酒でもつれた舌、遊び好きの手で」無分別にも自ら貧困に陥り、土地と一緒に分別をも抵当に入れ、先祖代々の財産を食い潰してしまう。何度も監獄暮らしを繰り返しながら、やはり人生の最後は牢獄で過ごすこととなり、そこで逝きたま後悔する。そして、すべてを失ってようやく儉約につとめ始めるのだが、「**底をについてからの儉約では遅すぎる**」。結局、彼らが辿り着くのは、惨めで、悲しく、恥辱まみれで、満たされることのない最後ののである。また彼らは満たされなくとも当然であり、重罪に値して然るべきなのがある。かつて「**自分の財産を食い潰す者**」、愚かな放蕩者たちは、ハドリアヌス皇帝の命によって、「**劇場で鞭打ちされ**」、公衆の面前で辱めを受け、非難されて社会から締め出されたのであり、哀れみを受けたり、援けてもらうことはなかった。トスカナ人やボイオティア人は破産者が出ると空の財布だけをぶら下げさせて裸にし、市場に連れて行った。その後ろには子供たちの行列ができたというし、市場に着くと一日中「**見せしめとされ**」、辱めと嘲笑を受けた。イタリアのパドヴァには、役所の近くに「**卑劣の石**」と呼ばれる石が置かれ、浪費家や借金を踏み倒す輩がいると、臀部をむき出しにして座らせる。こうして彼らを辱めることで、他の人たちが怖がって、無駄な出費をしたり、返すあてもないのに金を借りたりしないようにしているのだ。また法律家たちはかつて、常軌を逸した放蕩者が財産を食い潰したり、その家族を破滅に陥れたりすることがないように、狂人にすると同じように、後見人をつけて出費を抑えさせていた。

ここで、誰もがうつつを抜かしてしまう、二つの主要な害悪、これまでにさまざまな人々を誑かし、骨抜きにしてきた、酒と女について触れないわけにはいくまい。これらは、たいてい一緒にやってくる。

**酒に溺れる者、博打で破産する者は、
女のために身を持ち崩す。――**

悲しみは誰のためにあるのか、嘆きは誰のためにあるのか、とソロモン（「箴言」23.29）は問い、酒を好む者のために他ならない、と答える。酒が生み出すものは、苦痛（「**酒と怒りに苛まれ**」）と苦き心（「**集会の書**」31.21.）である。エレミアは「**怒りの酒**」（25）と呼ぶがそれも尤もで、**酒は健全な人を狂気に変える**。酒飲みは自分たちが何を言っているか、何をしているのかわからなくなる。アウグスティヌスが「**今日、ひどい出来事が起こってしまった**」と伝えているのは、キリラスの息子が酒に酔って「**残酷にも妊娠中の母親を絞め殺し、妹を犯そうとして、父親を半殺しにし、また別の妹二人に致命傷を負わせた**」事件である。「**酒は、悦びを与えるが、悲しみと**」、「**貧困と欠乏**」（「箴言」21）、「**恥辱と不面目**」をも与えると言うが、これはまさにこの息子のための格言であったと言えよう。アウグスティヌスは続けて言う。「**酒に溺れたがゆえ、多くの者**

が不名誉にも破滅し、面目もなくして、逃げ出す羽目となった」。すなわち多くの者が、破産し、財をすっかり飲める金、すなわち酒に変えてしまったために、ごろつきや物乞いのような生き方を強いられたのだ。こんなことがなければ、人々から敬われ、よき状態でいられたであろうに、ほんの数時間の快樂のため—聖ヒラリウスの期間（すなわち楽しい時間）はいつも短い—、あるいはセネカの言葉を借りれば「節度のない狂気」のため、終わることのない煩いと苦痛とを手に入れるのである。

もう一つの狂気は女に関する狂気である。女は「集会の書」にある如く「心を裏切り者にし」、「男の頭を弱らせる」。女は最初は心地よい。しかし、見た目には美しいが、食すと毒であるデイスコリデスの夾竹桃のようなもので、結局のところ、残りはニガヨモギのように苦く（「箴言」5. 4.）、諸刃の剣のように鋭い。また「女の家は地獄へ通ずる道であり、死の部屋に続いている」（「同」7. 27.）。これほど悲しいものはなく、女にうつつを抜かす者は、生きている間は惨めで、狂っていて、獣同然、まるで屠殺場に連れて行かれる雄牛のようだ。さらに悪いことに、アウグスティヌス曰く、女狂いと酒狂いは死後、裁かれて「恩寵をなくし、神の栄光を失い、永遠の墮獄へまっしぐら」。

—その短い快樂によって
天国での永遠の名誉が奪われる—

彼らが手にすることになるのは、地獄と永遠の墮獄なのである。

第 14 項

原因としての自己愛、自惚れ、褒め言葉、名誉、過剰な称讃、驕り、歓喜など。

自己愛、驕り、自惚れは「自分を盲目に愛すること」であり、クリュソストモスはこれを悪魔が仕掛ける三つの大きな網の一つ、ベルナルは「魂を突き刺して殺す矢」、「感覚では捉えることのできぬ狡猾な敵」とする。これらは憂鬱症の主要因である。怒り、肉欲、貪欲、恐怖、悲しみなど、これまでに論じた心の乱れにとらわれない場合でも、この自己愛が狡猾に、かつ気付かないうちに、我々を乱すこととなる。キプリアヌス曰く「貪欲に打ち勝つことができる人も、自己愛には負けてしまう」。「金や賄賂や贈物を蔑み、正しく誠実で、くだらぬ妄想にも惑わされず、あらゆる肉欲を抑えることができた人も、自惚れにとらわれることで、その評判が地に墮ちてしまった」（クリュソストモス「聖ヨハネについての説教」3）。「名誉よ、お前だけだ、我が魂と心を焼き焦がすのは」。これは憂鬱症の大きな症状であり、かつ原因である。我々は普段この自己愛を軽視し、まったく注意を払わないが、自己愛は我々の魂を激しく揺さぶり、憂鬱症や耄碌を惹き起こす。確かにこれは心地よい気分、柔らかく囁くようで皆が好む雰囲気であり、愛すべき

狂気、楽しい熱狂、抗いがたい熱情、心が悦ぶ誤ち、好ましい病気であるが、我々に甘くのしかかると、我々の感覚を麻痺させ、魂を眠らせ、心臓を風船のように膨らませる。しかも、これが気付かないうちに起こる。よって「自己愛を患う人は、一度もそれを自覚したことがなく、ゆえに治そうとも思わない」。我々は自己愛にとらわれると、我々にもっとも害を与える人を好きになり、進んで傷つこうとする。「我々は自分が褒められると嬉しい」（ヒエロニムス）。「素晴らしきボンキアルスよ、君のような男から贈物をもらえとは、嬉しい限りだ」などと言われると嬉しい。プリニウスは親友アウグリヌスに「君の書いたものはどれも感じのよいものだが、特に我々のことを書いたものが素晴らしい」とあからさまに認める。またプリニウスはこの後すぐ、マキシムスに宛て「自分が褒められるのを聞く嬉しさといったら、とても言葉に言い表せない」と告げる。取り巻き連中に偽りの言葉で褒めそやされても「自分たちの中にはそういったものは見出せず」、鼠のような美德が象のように大げさに言われているとわかるので、君主たちがそうするように、ただただにっこり笑うってそこに皮肉を込めるくらいしかできないのだが、その実、効果観面、動じてしまう。我々は「自分のことを褒められると」、たいていは怒ったり、「顔を赤らめたりするが、その実、内心では喜び、膨れ上がる。偽りの甘美、すなわち褒めそやす悪魔によって我々は見境なく膨れ上がり、我を忘れてしまう」。自己愛から生まれる二人娘は過剰な喜びと傲慢、すなわち心の軽さであるが、ヨッセ・ロリッヒが列挙するように、自慢、偽善、不平、好奇心など他の多くの悪徳をも相伴う。

この病の原因は我々の内から生じる場合もあり、外から生じる場合もあり、つまり、我々は自己愛に対して能動的であり、かつ受動的である。我々が能動因である場合、自己愛は我々の内部、すなわち自分の長所や価値（実際は無価値なのだが）に対する過度な自惚れから生じる。自身の気前の良さ、好意、気品、勇敢さ、強さ、富、忍耐強さ、従順さ、歓待心、美しさ、節制、生まれの良さ、英知、知力、知識、技芸、学問、すぐれた才能、財産などを根拠に、我々はナルキソスよろしく、自分自身を称え、褒めちぎり、称讃し、世間も皆同じように自分のことを敬っているものだと思ひ込む。醜い女は自分のことを美しいと言われると簡単にだまされてしまうものだが、我々も、自分の長所を褒められるとすぐに信じてしまい、簡単にだまされてしまう。我々は自分たちの作品については威張り散らし、それと比べて他人を蔑むものだ。パウロ曰く、我々は「知識ゆえに膨れ上がる」。すると本来は鶯鳥でも白鳥気分、自分のものは過剰に高く評価し、褒め称える一方、他人のことは低く見積もり、蔑む。我々は自分たちが二番目、いわんや三番目になることなど耐えられない。「何だと、オデュッセウスがこの俺様と比肩しうらだと」とはアイアースの言葉。他人は「自分を前にすれば鼠、蠅、蝨」にすぎなくなる。たとえ本当は自分より優れていたとしても、自尊心によって自分自身を過剰で尊大で傲慢で卓抜した存在だと奉り、それと比較すると他人はすべて虫けら扱いとなる寸法。そして、この自惚れという太鼓で膨れ上がるのは、賢人か金持ち、あるいは幸運で勇敢で美しい人だけである。こういった人達は、かの高慢なパリサイ人のように、自分は他人とは異なり、より純粋な貴金属からなる（と思っている）。

賢人ペリアンドロスによれば、「物事を上手くやり遂げるのは、誰よりも先にそれに取り掛かるものだけだ」と彼らは思っている。「私はある男を知っている」とエラスムスが紹介するのは、この世の如何なるものもアレクサンドロス大王の功績でさえ自分の筆には値しないと豪語した哲学者カリストネスのように高慢ちきな男で、この世に生きるあらゆる人間は自分に劣ると思っていたという。またシリア王セレウコス「自分に対抗できるのはローマ帝国ぐらいだ」と思っていた。「他人の方が自分よりも優れていると考えるような真の詩人、真の弁論家はいまだ出現しない」とかつてキケロが親友アッティクスに書いた言葉は今も有効だ。そして君主や権力者、偉大な哲学者や歴史家、分離派や異端の著述家、あるいは偉大な学者もまた、たいてい自己愛に取りつかれる。「哲学者は生まれながらにして名誉を求め生き物であり、噂や名声や人の意見の餌食となる」とヒエロニムスは定義し、たとえ栄光の侮蔑について書く哲学者でも表題に自分の名を記すことを忘れない、と指摘する。「名声よ、私はつねにお前に身を捧げてきた」とはトレベリウス・ポッリオの言葉。「我が名を高めることこそ我が願いの全て。私は日夜それだけに熱中してきた」と高慢なプリニウスも述懐。かの自惚れの弁論家キケロはマルクス・ルッケイウス宛書簡で「あなたの本に私の名を記載したいという激しい欲望で、私は燃えているのです」と臆面もなく告白する。そして、以下のような自惚れた言葉があふれ出すのも、この自己愛という泉からである。「詩歌が作られたら、杉の油で保護し、滑らかな糸杉の箱に入れて保存してほしい」。「私を舞い上がらせるのはそこの弱々しい羽ではない。——私は地上でぐずぐずすることなく飛び立つだろう」。「私はつまらないことやくだらないことを口にしないし、後世に残らないようなことを話したりしない」。「我が名は、激しいアウフィドゥス川が轟音を立てるところで囁かれることになるだろう。——私は青銅よりも永続する記念碑を打ちたてたのだ」（以上ホラティウス）。「私はようやく作品をつくり上げることができた。ユピテルの怒りでも業火でも壊すことができないような作品を……。もう死んでも、私はこのすぐれた作品によって天の星以上に高められて永遠となり、我が名は決して潰えることはないだろう」（オウィディウス）。そしてエンニウスの言葉は以下の如し。

涙で我が死を飾ることなかれ。葬儀で泣くことなかれ。

我が名は学識ある人々の間で飛び交うのだから。

著作家に共通するこういった高慢な詩句、馬鹿げた威張り散らしの類については枚挙に暇がない。アリストテレスの『トピカ』を論じたドゥ・ムシの自慢の仕方はこれ以上に凄まじいものがあるが、その意味で彼の名は忘れられないだろう。『名声論』のティポエも有名になるだろうが、それも宜なるかな、彼は名声について書いたのだから。取るに足らない詩人たちも皆、名声を勝ち得ることとなる——「彼らは俗人の喝采で輝くことを求めるのだから」。これまでに数多くの偉大な書物が書かれ、有名な記念碑が打ち立てられ、強固な城が築かれ、マウソロスのような巨大な墓がつくられてきたのは、まさにこの自画自讃の気質によるものであり、彼らは自分たちの

功績を永遠のものとしようとしてきたのである——「人が来て、ここに某眠ると言われんがため」。あるいはテーベの壁にフリユネーが「フリユネー作」と記したように、自分の名が刻まれるのを見たいがため。またこれが原因で争いが起き、多くの血が流されることもある。「またこれがために眠れぬ夜をすごすことにもなる」。

私は偉大な冒険を企てるが、その力の源は栄光であり、

名誉を得ることであり、ちょっとした称讃であり、自尊心であり、自己愛であり、虚栄心である。これがために、人は苦勞を惜しまず、上述のような馬鹿げた詩句を口にし、この激しい自惚れのために、人は他人を馬鹿にする。ただ文法家のバラエモンが「文学は自分とともに生まれ、自分とともに死すと豪語して」ウェアロを虚仮にしたように、「馬鹿げた自惚れによる軽蔑は耐え難い」。またこれがために人は高慢ちきになって、口答えされると我慢できない、あるいは、ヒエロニムスが指摘するように「自分を褒め称える言葉以外は受け付けなくなる」。アウグスティヌスの言葉はこれを支持する——「彼らが日夜熱中するのは、褒められ称讃されることだけだ」。実際、賢人から見れば、彼らは狂気であり、中身が空っぽであり、うすのろであり、我を見失い、軽蔑の対象でしかない。「角を欲しがり耳を失う諺のラクダのように」彼らのやることは下らないことばかりで、去年の暦のように役立たない。「人がしたことは、その人が自慢しすぎるために滅びる」。彼らが求めるのは名声と不滅なのだが、得ることのできるのは不名誉と不面目だけ、たいていは狂っていると中傷され、期待していたのとはほど遠い結果となる。「おお少年よ、お前は長く生きられないのではないか」と人は常に不安に思うが、エウセビウスが見抜いたように、詩人、修辭家、哲学者、ソフィスト、数多くいる中で、かつて彼らが書き残した作品で、現在も残っているのは千冊に一冊もない——「彼らの名と本は、彼らの身体とともに朽ち果てた」。彼らが虚しく夢想するように、称讃され、不滅となることは決してない。マケドニア王フィリッポスは勝利に満悦する最中、それで影響力が増すわけではないと言われたというが、自惚れる人々に対しては、こう言うことができるかもしれない。

我々は君たちを称讃するが、愚かな大衆とは違う。

君たちの姿にゴルゴンやハルピュイアや復讐の女神を見る。

また、たとえ称讃され、名誉を与えられ、褒め称えられたとしても、世界全体からすれば、我々の名が広まるのはごくわずか、我々のことを知る人などほとんどおらず、書物も薄っぺらで、あたかも地図上にぼつんと浮ぶアルキピアデスの領地のように心もとない。しかしそれでも、誰しもその名を不滅のものとし、その名声を地球の反対側にまで轟かせたいと望むのであるが、その実、その名を知っていたり、聞いたことがある人がいるのは、自分の住む地方や都市の半分、いや四分の一にも満たない。よしんば都市全体にその名が広がったとしても、王国に比べれば都市

などたかがしれているし、王国の外には、ヨーロッパがあり、世界が広がる。世界には果てがあるにちがいないのだが、星の輝く天球は、我々の眼に映る限りでも地球の十八倍の大きさがある。もしある者たちが主張するように、星の数が無限で、あらゆる星が太陽であり、その周りには我々の太陽と同じく惑星がいくつかあって、そのすべてに人が住んでいるとしたらどうだろう。それと比べれば我々の住んでいる世界などちっぽけなものにすぎず、だとしたら我々の栄光などありえない。ペトロニウスの『サテュリコン』でエウモルポスは「ローマ皇帝アウグストゥスは全世界を支配した」と言い、コンスタンティヌス時代、エウセビウスも同様に「皇帝は地上の全てを見事に支配し、世界中の民は皇帝の臣下である」と豪語した。またアレクサンドロス大王は四つの王国を支配したなどと言われたが、ギリシア人やローマ人が支配しえたのは、現在知られている世界の十五分の一にも満たず、当時知られていた世界で考えても、その半分に満たなかった。人はみなブラガッドッチオよろしく大言壮語をやめられないのかもしれない。キケロが言うように「我々の地上での名声はなんとも短く」、「なんとも小さく、恥じ入ることになる」。どんな所領であれ、どんな小さな地域であれ、どんな都市であれ、寛大な人物や、文句なく勇敢な人物がいるもので、そういった人物は我々が死んだ後にも、その名が知られていくものである。ウェールズのカドワラダー、ノルマンディのロロ、シャーウッドのロビン・フッドとリトル・ジョンなど、それぞれ故郷ではローマにおけるカエサル、ギリシアにおけるアレクサンドロスとその右腕ヘパイステイオンと同じくらい有名である。「どんな時代も、どんな人でも、後世の人の模範となり、称讃の対象となる」。どの町、どの都市に行っても、また、どの本を読んでみても、地元の勇敢な軍人、政治家、学者の話で持ちきりである。ブラシダスは確かに名将で、善良な男であり、スパルタでは並ぶものなき人物と考えられていたが、いみじくも彼の実母が言ったように「スパルタはブラシダスよりもすぐれた人物を多く輩出してきた」のである。つまり、君がどんなに自分自身、あるいは君の友人のことを褒めそやしてみたとしても、世の中には世間では知られていない人が数多くいて、すでに君や君の友人よりももっとうまくやりのけていたかもしれない可能性があることを忘れてはならない。

内的自己愛に起因する狂気のもう一つは、上記のものとは異なり、無自覚のうちに狂気となるもので、自分が狂気であることに気づかない。たとえば称讃や栄光を一切蔑む人々がこの例で、彼らは自分たちこそこの病気からはもっともかけ離れた存在だと考えているが、その実、もっとも狂っている。「彼らは、また別の自惚れで、人を蔑む」。犬儒派の仲間である修道士や隠者や世捨て人などがこれにあたり、彼らは俗世間を軽蔑し、自分自身を軽蔑し、あらゆる肩書き、名誉、地位を軽蔑するが、そうやって軽蔑する点において、ともかく人よりも優れていると自惚れる。彼らは謙虚さを誇り、アウグスティヌスが『告白』(10.38)で述べるように「人はしばしば、栄光を虚しいものと軽蔑しながらも、そのことをさらに虚しく自慢する」。彼らはディオゲネスのように、内心で自慢し、高潔であるという自惚れで肥え太るわけで、彼らのいう高潔も偽善にすぎない。黄金の布さえ買えるような身分高き人たちの多くが、毛織の粗末な服に身を包み、その

外見によって身を卑しくし、つましくしているように見えるのだが、彼らの心のうちは高慢と傲慢と自惚れで膨れ上がっている。それゆえ、セネカは友人ルキリウスに次のように助言している。「身なりや身ぶり、行動においては、目立つことは特に避けるようにした方がいい。たとえば襦袢を纏ったり、髪の毛をぼさぼさにしたり、髭を伸ばしたり、金を軽蔑したり、粗末な家に住んだりしたりすれば、かえって逆に名声につながってしまうよ」。

この自己愛という狂気はすべて我々の内部から生じるものであるが、我々を乱打して打ち乱す主砲は他人からの言葉であり、この点において、我々はただただ受動的である。取り巻き連中やおべっか使いから、過度な褒め言葉や美辞麗句、諂いの呼びかけや偽りの讃辞で飾り立てられ、称讃されると、それに値しない数多くの愚かな人は勘違いし、理性を失う。ヒエロニムスが指摘するように、この褒め言葉ほど「激しいものはない」。「称讃という甘い蜜」は、太鼓や笛や喇叭以上に人を鼓舞する力があり、人を肥大化させ、一瞬のうちに奮い立たせたり、また逆に地の底へ突き落としたりする。

名誉が与えられねば瘦せこけ、与えられれば肥え太る。

ちょうど霜によって兎が太ったり瘦せたりするように、人は褒め言葉によって太ったり瘦せたりする。「過度に褒められ、称讃されても、心動かされることのないほどに感情を抑制できる人など存在するだろうか」。どんなに頑張っても、取り巻き連中によって心乱されてしまうこと必至である。たとえば国王ならば、九英傑の一人とされ、人間以上の存在、すなわち神とまで持ち上げられ（皇帝ドミティアヌスの勅令は「**我らが主、神の勅令**」と呼ばれていた）、生贄を捧げられるようになる。

——**汝が神の名誉を受けるのであれば、我らは
進んで捧げものをし、汝のために祭壇を作るだろう。**

軍人ならば、名将テミストクレスやエパミノンドス、さらには伝説のヘクトル、アキレスと比肩され、「戦いにおける二つの雷」、「大地を支配する三本の柱」などと呼ばれる。大小二人のスキピオの武勲を合わせても足りず、決して打ち負かされることなく、常に平然としていて、数多くの戦勝の記念碑で飾られ、自然を支配するものと呼ばれるが、実際のところは鎧をかぶった小兎にすぎず、臆病者で軟弱者、かつてクセルクセスが言われたように、「戦うときは最後まで、逃げる時はいの一番」、敵と面と向かうことさえできない。もし大男なら、サムソンやヘラクレスの生まれ変わりだともてはやされる。演説をすれば、キケロやデモステネスの再来だと言われ、「使徒行伝」のヘロデ王のように「人間ではなく神の声だ」と称讃される。詩を作れば、ホメロス、ウェルギリウスだと称讃される。ちなみに私の愚かな患者はというと、こういった讃辞

をすべて自分に向けられたものだと考えている。そして学者の場合、読書量や優雅な文体や方法などを褒めちぎられると、ちょうど蜘蛛のように身体の中身を全部出してしまつて骨抜きとなり、勉強しすぎて死んでしまう、

孔雀のように、褒められた羽を見せびらかすからだ。

軍人の場合、称讃されたり、その武勲を称揚されたりすると、アキレスと「劣勢で」戦つた「不幸な少年」トロイラスのように、無謀にも巨人と戦つたり、先頭に立って攻撃したり、あるいはマケドニア王フィリッポスのように、敵軍の真只中へ馬で乗り込んでいったりする。家政を褒められれば、家計を切り詰めすぎて乞食となるだろうし、節制を褒められれば、行き過ぎて餓死することになる。

——美点は褒められると増長する、
名誉は人を大いに駆り立てる拍車なのだ。

拍車を掛けられ、駆り立てられて狂い、狂つてしまうと歯止めが利かない。そして「対抗馬がいることさえ我慢できなくなり」、人々に褒められるため、そしてその名誉を維持するために、アルプス越えさえしてしまう。野心的な人、たとえば高慢な君主や権力者を褒めてみるがよい。エラスムスが言うように、その人は「過度に褒められて有頂天、人の皮を脱ぎ、自分を神だとみなすようになる」。

——神々に等しき権力者と称えられると、
何でも信じてしまうようになる。

アレクサンドロス大王の場合はどうであったか。当然至極、ユピテルの息子とされ、獅子の皮をかぶつたヘラクレスの如しと称えられた。皇帝ドミティアヌスは神扱い（「我らが主、我らが神はかくあれかしと命じる」とは彼の決まり文句）、その様はまるで、都市バビロンを来訪する者すべてにその偶像を拜ませたペルシア王の如くであった。皇帝コンモドゥスもおべっか使いの取り巻き連中にだまされ、自分のことをヘラクレスと呼ばせた。ローマの將軍アントニウスは鷲の王冠をかぶり、四輪馬車に乗り込み、バックスとして称えられた。トラキア王コテュスは女神ミネルヴァと結婚したとされ、三人の使者を次々に派遣し、自分の寝室に女神が現れたかどうか確かめさせた。同様に、医者メネクラテスは自らをユピテルと呼び、皇帝ディオクレティアヌスはヨウィウスと改名し、その右腕マクシムスはヘラクレスとなった。ペルシア王サバルは太陽と月の同胞とされた。トルコ皇帝は今も地上の神、王の中の王、神の現し身であり、あらゆるものがその命に従うとされるし、現在の中国皇帝、タートル王も同様である。クセルクセスも同

類で、海に鞭打ち、海神ネプトゥスを従えると愚かにも豪語、アトス山に挑戦状をたたきつけたという。このような愚かな君主の数は多く、取り巻き連中によって愚者の楽園へ送られた。これはあらゆる人に共通する性質で、高い地位にあつて、名誉の絶頂に達する、あるいは何かを成し遂げて評価されると、自画自讃し、威張り始める。普通の職人でも、ちょっと優れていると、空威張りが始まって馬鹿丸出し、プラタ曰く「愚かさを露呈してしまう」。彼らには優れた点があり、しかも、そのことを自覚しているので、わざわざ褒めてやる必要はない。まず自分の美点に酔いしれて、にたにたし始め、次いで、過去の勝利や喝采のことばかり考えるようになり、最後には完全に狂ってしまい、理性をなくす。ペトルカは「現世に対する蔑み」で、自分自身そうであったと告白し、カルダーノは『知識論』でミラノ市民で彼の友人でもあった金大工の例を挙げる。そのガレアツォ・ロツソという男は、アルキメデスの道具を再発見したことで称讃され、喜びのあまり狂ってしまったという。プルタルコス「アルタクセルクセス伝」にも似たような話があつて、カムスという軍人は、戦いでキュロス王に傷を負わせたのだが、「その戦績ゆえに傲慢となり、瞬く間に理性を失った」。新たに名誉、地位、抜擢、戦利品、褒美、領地、遺産などが思いがけず与えられると、多くの人は喜びのあまり、またそのことばかりを考えてしまい、眠れなくなったり、言動がおかしくなる。この場合、いきなりのほせ上がり、空虚な自惚れで我を忘れてしまうので、こうなると始末におえない。エパミノンドスが、レウクトラでの勝利の翌日、「みじめで落ちぶれた様子で帰ってきた」のはそれゆえだ。友人に問われて応えたところによると、彼は自分の武運の強さに不遜な態度をとり、過剰に喜んでしまった前日の自分への戒めのためにそうしたのだという。かの聡明で美德の貴婦人キャサリン女王、イングランド皇太后も、非公式な場で、時の運について次のように語ったことがある。「幸運にしても不運にしても、私は極端なものに見舞われたくありません。しかし、どうしてもどちらか一方に見舞われなければならないとしたら、私は不運の方を選びます。なぜなら、こちらにはつねに慰みが欠けることがありますし、幸運の場合は議会と政府がともにうまく機能しなくなりますから」。そして彼女の言葉通り、議会と政府は節度を守ることができなかった。

* 太字表記は原文がラテン語であることを示す。

テキスト

(底本) Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy (Oxford English Text)* (6 Vols.).

Ed. by T. C. Faulkner, N. Kiessling and R. L. Blair. Oxford: Clarendon Press, 1989-2000.

(参考) Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy (Facsimile) (The English Experience)*.

Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum, 1971.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy, What It Is, with All the Kinds, Causes, Symptomes, Prognostickes & Severall Cures of It*. Ed. with an Introduction by Holbook Jackson. New York: Vintage Books, 1977.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy: now for the first time with translation*

and embodied in an All-English text. Ed. and trans. by R.Jordan-Smith and F. Dell.
London: Routledge, 1931.

既訳

「第1部第1章第1節」	『京都府立大学学術報告	人文・社会』	第59号	2007	所収
「第1部第1章第2, 3節」	『京都府立大学学術報告	人文・社会』	第60号	2008	所収
「第1部第2章第1節」	『京都府立大学学術報告	人文』	第61号	2009	所収
「第1部第2章第2節」	『京都府立大学学術報告	人文』	第62号	2010	所収
「第1部第2章第3 - 10節」	『京都府立大学学術報告	人文』	第63号	2011	所収

(2012年9月30日受理)

(おかむら まきこ 文学部共同研究員)

(かわしま のぶひろ 龍谷大学准教授)